

学生自身の経験と主観に基づいたレポート論題

映像学部

宋 基燦

1. 実践事例「2021 年度春semester『映像と表現 (GB)』」について

(1) シラバス上の授業概要

①映像の原点、②映像と表現の方法、③映像と社会、以上の3点を軸にし、歴史的視点を土台として多数の実例（視聴覚資料）を紹介しながら、映像文化の諸相を検討していく。また、専門を問わずに様々な学問に取り組む上で基礎となる知識と思考法を提示する。

(2) 受講人数

登録：300 人（毎回の出席人数平均：255 人）

(3) 成績評価方法

期末レポート（レポート試験）：40%

平常点評価：60%

* 平常点評価：講義で提示された内容に対する受講生のリアクションを用いて授業参与度として評価する。

(4) 授業実施形態

初回は対面＋オンライン、2回目からは zoom を用いたオンラインリアルタイム配信（水曜 4 限）、授業録画動画の公開は行わない。

2. 授業運営における工夫

(1) 基本ポリシー：授業で受けた刺激に対して受講生が自ら考え、積極的に参加して、自分のことを発見できる授業を目指す

(2) 受講生の参加を促す

・授業リアクションペーパー：根本的かつ興味深い質問、もしくは「自分がその立場だったらどうする？」など、学生が反応しやすい質問を常に投げかける。

Ex) 視覚障害者は「見る」ことができるか？ 自分自身が写真が発明された当時の画家だったらどのような行動をとるか？ など

・受講生参加型中間レポート（参考資料4）

6月23日の授業での説明を参照して、ある「社会的事実（Social facts）」を読み取ることができる（もしくは表象している）と、自分が思う写真を撮影し、その写真が示している社会的事実について簡単に説明（300文字以上、500文字以下）してください。

本レポートは、授業中発表することができます。（発表者には平常点評価における「加算点」があります）

授業中発表は以下の手順で行います。

- ・授業中発表は7月7日の授業で行います。
 - ・教員がレポートを確認し、約30名の発表候補者を選定し、
 - ・その名簿を授業当日までmanabaのコースニュースに公開、
 - ・授業中、名簿の人に発表する機会を与える。
 - ・発表は、提出したPDFファイルを発表者自身がzoomの画面共有機能を用いて行ってください。。
- *写真は、必ず自分が撮った写真に限ります。なお写真撮影においては一般的撮影倫理を守ってください。

(3) オンライン授業における授業環境の確保

- ・毎回の授業が始まるときに、全員カメラオンで授業参加環境の確認を行う。
- ・Manaba+r のをアンケート機能を用いた「インタラクティブ・アンケート」の運用

(4) 平常点評価における公正な成績評価のための授業参加の客観的根拠の確保

- ・「インタラクティブ・アンケート」と授業リアクションペーパー

3. 期末レポート（内容については参考資料1を参照）

(1) 「自身」や「自身の経験」について語らすレポート

(2) 単純な「自己語り」を超えて

- ・授業参加の積み重ねとしての期末レポート
- ・具体的な理論と概念の理解に基づいた自己分析・自己語り

(3) プライバシーの問題

4. 学生自身の経験と主観に基づいたレポートの条件

- (1) 自分の経験と考えについて考察可能な具体的理論や概念、参考文献の提示
- (2) 授業中十分に説明した内容の延長線上、もしくは関連が深いところに位置するテーマ
- (3) 適切な分量

(4) 個人情報とプライバシーへの配慮

5. 可能性と課題

〈参考資料 6〉の受講生感想からも確認できたように、授業で得られた知識を自分の人生や日常生活に適用して理解を広げる学びへとつながる可能性が認められる。しかし、一部の学生においては、自分を語る、自分を顕にすることに困難を覚えている学生も確認できる。

〈参考資料目録〉

1. Manaba + R 掲載期末レポート案内	4
2. 期末レポート参考資料	6
3. 期末レポート形式サンプル	8
4. 中間レポート事例	
事例 A	12
事例 B	14
5. 期末レポート事例	
事例 A	15
事例 B	17
事例 C	19
事例 D	21
事例 E	23
事例 F	25
6. 授業全体に対する受講生感想（抜粋）	27



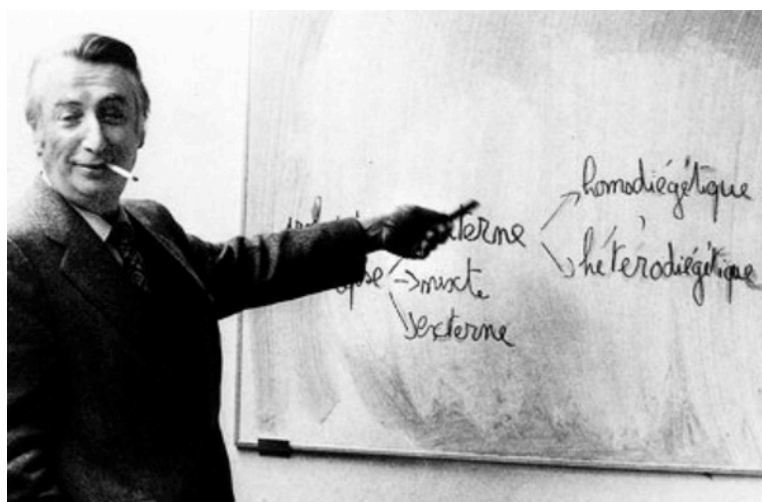
プレビュー

期末レポート(レポート試験)(レポート試験)	
課題に関する説明	■ 字数/枚数 Number of characters / pages 1,500文字以内 ■ 論題 Report topic 「映像体験における記号論と主体：ストゥディウム、プンクトウム、指標性（indexicality）」 授業中に何度も紹介したように、フランスの哲学者ロラン・バルトは、写真をみるという映像体験から個人に伝わって来るものをストゥディウム（studium）とプンクトウム（punctum）に区別しました。これは「映像」という対象と、その受容者であり、現代社会における映像の受動的消費者でもある私たちとの関係を考える、もしくはその関係における転覆の可能性を考える上で、非常に参考になる概念であると言えます。そこで、2021年度春セメスター「映像と表現GBクラス」の期末レポートの論題は、上記のように、「映像体験における記号論と主体：ストゥディウム、プンクトウム、指標性（indexicality）」であります。 受講生の皆さんは、このタイトルのレポートを提出してください。レポートの内容と形式は次の通りです。減点と失格の対象になることがありますので、以下の内容と形式をよく読んで、必ず守ってください。 まず、報道写真や作品写真をできるだけ沢山鑑賞してください（写真に関する指定はありませんが、必ず公表された作品に限ります。友人のインスタグラムの写真などは対象外です。）。その中で自分が、ロラン・バルトが『明るい部屋—写真についての覚書』で示した概念である「プンクトウム（punctum）」を感じる写真を1つ選んでください。選んだ写真をレポートで紹介します。紹介する際は、写真のタイトル、作 名、撮影年度を明記して下さい（作 や撮影年度不詳の場合は「不詳」と書いてください）。そして、必ずレポートにその写真を挿入して下さい（レポートのPDFファイルの中に写真が挿入された状態、つまり写真ファイルがPDFファイルの中に含まれた状態で提出して下さい。写真ファイルとPDFファイルを別々に提出した場合は、提出形式の重大な違反としてその提出物は失格とします。よく分からない場合は、この下にアップロードしたレポート形式サンプルファイルを参考にして下さい）。 その後、ストゥディウム（studium）とプンクトウム（punctum）に関するロラン・バルトの文献『明るい部屋—写真についての覚書』や、写真論、記号論関連の文献などを読んで、この概念を自分なりに理解し、この概念に対する自分の理解を文章で示しながら、自分が選んだ写真への解釈を行って下さい。 その際、自分自身が「プンクトウム」を感じる理由について具体的に説明して下さい（これが最も重要ですが、その「プンクトウム」に関わる個人的経験・記憶が公に共有できないものである場合は、無理してそれを紹介する必要はありません。この場合は、プンクトウムへの説明の共有が可能な別の写真を選んでください）。 使用するフォントの指定はありませんが、分量は写真入りでA4用紙2枚（1,500文字）を超えないでください。 提出するファイル名は、必ず以下のようにして下さい。 所属学部 学籍番号 個人名.PDF 例：文学部1234567映像太郎.PDF（拡張子の「PDF」は「pdf」でも大丈夫です） ロラン・バルトの本は図書館にもあるが、ここに『明るい部屋』のバルト自身の説明を転載したファイルをアップロードしておきますので参考にして下さい。その他の文献については、図書館などを利用して下さい。 なお、レポートファイルの形式のサンプルファイルもアップロードしておきます。参考にして下さい。 なお、提出した課題物は「一括回収」されます。 そのために、レポートファイルをアップロードしたものの、最後まで「提出」ボタンを押しておらず、提出手続きが完了していない人のレポートは、提出として認めませんので、各自責任を持って最後まで自分の提出手続き完了を確認してください。特に1回生の皆さん、丁寧に確認してください。 <Word等をPDFに変換する手順は以下のリンクをクリック> https://secure.ritsumei.ac.jp/academic-affairs/assets/file/current/pdf_jp.pdf <To convert Word etc. to PDF click the link below> https://secure.ritsumei.ac.jp/academic-affairs/assets/file/current/pdf_en.pdf
受付開始日時	2021-06-22 13:00
受付終了日時	2021-07-22 17:00
受付終了後の提出	許可しない
ポートフォリオ / 閲覧設定	ポートフォリオに追加しない / 回収のみ行なう・コメント不可
学生による再提出の許可	再提出を許可しない

提出物の印刷・配布	事務局による印刷・配布を希望しない
添付ファイル	「映像と表現」期末レポート参考資料.docx - 2021-06-14 10:41:21 映像と表現GB期末レポート形式サンプル.docx - 2021-06-14 10:41:21
閉じる	

[▶レポート一覧へ戻る](#)

ロラン・バルトの本は図書館にもありますが、ここに『明るい部屋』のバルト自身の説明を転載しておきますので、参考にしてください。



ストゥディウムとプンクトゥム（抜粋）

第1の要素は、明らかに、ある広がりをもつものである。それは、私が自分の知識や教養に関してかなり日常的に認めているような、ある一つの場の広がりをもつ。その場は、写真家の技術や運不運によって、様式化に程度の差があり、出来栄えにも程度の差があるが、しかし必ず、ある典型的な情報に関係している。たとえば、それは反乱とニカラグアとそしてこの二つに関するあらゆる記号、つまり、貧しい私服の戦闘員たち、廃墟と化した街路、死者たち、苦悩、太陽、重そうなまぶたをしたインディオたちの眼などである。何千という写真が、そうした情報の場によって成り立っており、確かに私はそうした写真に対して、一種の一般的関心、時には感動に満ちた関心を抱くことができるが、しかしその感動は、道徳的、政治的教養（文化）という合理的な仲介物を仲立ちとしている。そうした写真に対して私が感ずる感情は、平均的な感情に属し、ほとんどしつけから生ずると言っても良い。フランス語には、この種の人間的関心を簡潔に表現する語が見当たらない。しかし、ラテン語にはそれがある、と私は思う。それは、ストゥディウム（studium）という語である。この語は、少なくともただちに「勉強」を意味するものではなく、あるものに心を傾けること、ある人に対する好み、ある種の一般的な思い入れを意味する。その思い入れには確かに熱意がこもっ

ているが、しかし特別な激しさがあるわけではない。私が多くの写真に関心をいだき、それらを政治的証言として受けとめたり、見事な歴史的画面として味わったりするのは、そうしたストゥディウム（一般的関心）による。というのも、私が人物像に、表情に、身振りに、背景に、行為に共感するのは、教養文化を通してだからである（ストゥディウムのうちには、それが文化的なものであるという共示的意味（コノテーション）が含まれているのである）。

第2の要素は、ストゥディウムを破壊（または分断）しにやって来るものである。こんどは、私のほうからそれを求めて行くわけではない（私の至高の意識をストゥディウムの場に充当するわけではない）。写真の場面から矢のように発し、私を刺し貫きにやって来るのは、向こうのほうである。ラテン語には、そうした傷、刺し傷、鋭くとがった道具によってつけられた標識（しるし）を表わす語がある。しかもその語は、点を打つという観念にも関係があるだけに、私にとってはなおさら好都合である。実際、ここで問題になっている写真には、あたかもそうした感じやすい痛点のようなものがあり、時にはそれが斑点状になってさえいるのだ。問題の標識や傷は、まさしく点の形をしているのである。それゆえ、ストゥディウムの場をかき乱しにやって来るこの第2の要素を、私はプンクトウム（*punctum*）と呼ぶことにしたい。というのも、プンクトウムとは、刺し傷、小さな穴、小さな斑点、小さな裂け目のことであり——しかもまた、骰子の一振りのことでもあるからだ。ある写真のプンクトウムとは、その写真のうちにあって、私を突き刺す（ばかりか、私にあざをつけ、私の胸をしめつける）偶然なのである。

ロラン・バルト 1985 『明るい部屋—写真についての覚書』（花輪光訳）みすず書房

2021 年度春セメスター『映像と表現 GB』期末レポート

「映像体験における記号論と主体：ストゥディウム、プンクトゥム、指標性
(indexicality)」

所属学部

学籍番号

名前

* 選んだ写真作品・報道写真を以下のようにレポート本文に貼る。



ロバート・キャパ 《共和国軍兵士、コルドバ戦線、スペイン》1936 年

*必ず写真の作家とタイトル、年度を明記すること(不詳の場合は「不詳」と表記)。

以下、レポート本文

<参考文献>

注意

*必ず参考文献をつけること。

*必ず、ファイル名の形式を守ること。

*必ず、PDF ファイルに変換すること（提出はPDF ファイルに限る）。

2021年度春semester『映像と表現GB』中間レポート

所属学部 法学部 二回生

学籍番号

名前



ここは、いわば私の”大学”と言える場所である。大学生としての半分以上の時間を私はここで過ごしてきた。新型コロナウイルスの脅威は尊い命の他に、私たちが送るはずであった「普通」の時間も奪っていった。今でこそかなり今までに近い生活を送れつつあるが、私はこの”大学”で過ごした時間の方が圧倒的に長い。

本来なら大学に出向いて授業を受けるはずだが、大人数で集まることを要する授業は、クラスターの危険があるとされオンラインになった。大学で出会うはずの友達とは、外出を控えなければならなかったため、SNS上でなんとか知り合ってこの携帯で必死に関係を繋ぎ止めた。zoomの中で遊んだ。このように、これまでの一年半は全

てのことが部屋という大学の中で完結する日々だった。

私だけではなく、全国の大学生が同じような状況だっただろう。もどかしい時間を過ごしてきたに違いない。新型コロナウイルスの影響は私たちの学生時代を大きく変えたが、いつかそんなこともあったなとマスクを外して言える日が来ることを願っている。



この写真は、自由席の場合に教室の前方は空席が多く、教室の後方に人が集まって座っている場面である。席は早いもの勝ちで着席することができるので、広い教室の後方から順に埋まっていく。本来、授業は前にいた方が聞き取りやすく先生とのコミュニケーションをとることができるため、教室の前方から座っていくべきである。しかし、教室は後方から席が埋まることが多い。

理由の1つとして、周りの目を気にするという人が多いことが挙げられる。教室の前方に座ると「真面目なヤツ」「積極的なヤツ」というような負のレッテルを貼られる。「真面目なヤツ」「積極的なヤツ」が悪いということはおかしいが、友人関係を築いていくためには周りに合わせて行動することが欠かせない。「真面目なヤツ」という暗い印象より、一緒にいて楽しく授業も一緒に受けたい友達であることが重視されるだろう。

このように、周りの目を気にして周りに合わせて行動する人が多いからこそ、教室の前方に空席が生まれ、教室の後方から咳が埋まるということが読み取れる。

「映像体験における記号論と主体：ストゥディウム、プンクトゥム、指標性 (indexicality)」

所属学部 法学部

学籍番号 [REDACTED]



作家：ヴィヴィアン・マイヤー タイトル：不詳 年度：不詳

私は上記写真を、ロラン・バルトのストゥディウムとプンクトゥムの自分なりの理解を交えながら解釈していきたい。

まずストゥディウムとは、道徳的、政治的な教養（文化）という合理的な仲介物を仲立ちとした一般的な関心や感動である。それは、平均的な感情に属するものであり、写真家の狙いや目的を読み取る上で重要なものである。つまり、チャーリーズ・サンダース・パースの「記号論」のような、アイコン（図像）、インデックス（指標）、シンボル（象徴）といった形で解釈できるのがストゥディウムだと私は考える。

私はこの写真は、戦後の黄金期と言われたアメリカの貧しい側面を表していると考ええる。彼らの身なりは綺麗とは言えず、また右の少年の脚は非常に細く、左の少年の脚にはあざがある。この写真がいつ撮影されたかは不明だが、1950 年代から 1990 年代のうちに撮られたといわれている。この写真の撮影者であるヴィヴィアン・マイヤーの作風はスト

リートスナップで、アメリカの都市生活の側面をユーモラスに感動的に美しく、そして生々しく撮影している。

彼女が撮影していた時期は第二次世界大戦と重なっている。第二次世界大戦で勝利したアメリカは、裕福な国という印象が強かった。しかし、その陰で貧困者は増え、貧富の格差は大きくなった。左の少年の脚からは、裕福だと思われるアメリカの貧困の面を読み取ることができる。また右の少年の脚には大きなあざがある。このあざがいつどのようにできたものかはわからない。しかし、彼らの下半身の写真から、戦後のアメリカの混乱に巻き込まれた少年たちの姿を見ることができる。

一方でプンクトゥムとは、ストゥディウムを破壊するように、まるで私たちを刺すかのように迫ってくるものであり、偶然的なものである。写真の中のある細部が私たちをひきつけ、その細部によって眺めている写真が一変し新しいものになる。その細部は私たちのある経験を触発するがために、ある種の痛みを伴うものになると考えられる。

私は、この写真の左の少年のふくらはぎのあざにプンクトゥムを感じた。私のふくらはぎには生まれつき大きな黒子がある。それはちょうど少年のあざと同じ位置にある。私はその黒子が好きではなかったし、今でも好きになれない。黒子が見えないように、長いスカートをはいたり、制服や体操服で短いものをはかなければならないときは、どんなに暑くても黒子が隠れる長さの靴下をはいたりした。誰かに見られるというよりも、誰かに指摘されるのではないかとということが気になって、そして怖くて仕方なかった。

プールの授業では、水着を着なければならず、黒子が隠せなかった。そのためどうすれば黒子が隠れるかを考えることに必死だった。しかし、どんなに隠そうとしたところで完璧に隠せるはずもない。ある日水着に着替えている最中友人に、「そんな大きな黒子があるんだ。それは結構気になるかも」と言われた。そのときは自分が惨めで恥ずかしく、笑うしかなかった。今は黒子への気持ちは少し改善されたが、黒子が見えていると思うとあまり落ち着かない。なぜそこまで思う人もいるかもしれないが、私にとってはこの黒子が一番のコンプレックスなのである。

この少年の写真を見ていると、黒子を隠そうとする自分、そして友人に指摘される自分が思い浮かぶ。それと同時に、あざを気にせずさらけ出せる少年にうらやましさも感じてしまうのである。

以上がストゥディウムとプンクトゥムを交えた私なりの上記写真に対する解釈である。ストゥディウムとプンクトゥムは映像を見て解釈する上で重要であり、映像と私たちとの関係を考えるうえでも非常に大切なものである。

〈参考文献〉

- ・ ロラン・バルト 『明るい部屋—写真についての覚書—』 (花輪光訳) (みすず書房、1985年)
- ・ Vivian Maier ほか 『Vivian Maier : Street Photographer』 (powerHouse Books、2011)



「FEMEN のトップレス抗議」2012 年 6 月 撮影者；不詳

この写真はサッカー欧州選手権 2012 (UEFA EURO) のスウェーデン対フランス戦が行われたウクライナ・キエフで 19 日、同国の女性権利団体「FEMEN」が試合開始を待つスウェーデンのサポーターを前にトップレス抗議を行なっている画像である。

ロラン・バルト著の『明るい部屋』を読んで私なりに解釈するとストゥディウムとは「思い入れには熱意はあるが、特別な激しい熱意ではなく、平均的な感情で眠から生ずる共示的意味を持つもの」でありプンクトウムとは「ストゥディウムを破壊するもので分析によって見つけるものではなく、映像を正面から受け止めることだけで、感じる事ができる部分的対象のこと」である。写真とは、ストゥディウムがないと撮れないものでプンクトウムはストゥディウムがないと生まれない。バルトによると、プンクトウムは撮影者の意思によって生まれるものではなく、個人が写真を見たときに発生する激しい感情や感動であると述べている。プンクトウムには二種類の性質があり時間のプンクトウムと、空間のプンクトウムというものが存在する。時間のプンクトウムは、かつてそれが存在していたことを読みとることでバルトのいう『圧縮された「時間」のめまい』を感じることができるものである。また、空間のプンクトウムとは、電撃的なもので、「拡大の能力」を持ち、「媒体としての自己を空無化」させるものである。

以上を踏まえて、私はストゥディウムとは文化的・宗教的・倫理的観点から多くの人間が感じとる一般的関心のことであると考え。そして、プンクトウムとは、大勢の人にとって理解できるものではなく、一般的関心よりも自分に訴えかけて

くる自分にしかわかることのできない細部への「愛」のように考える。

次に、私が選んだ上の写真について論じる。まず、プンクトウムとは、ストウディウムを破壊、分断しにくるものであるため先にこの写真のストウディウムについて軽く論じる。この写真は FEMEN というウクライナのキエフを中心に活動するフェミニズム抗議団体の活動が阻止されている状態を示している。サッカーの試合が終わるとスタジアムの外でトップレスの女性数人が抗議活動を始め男性スタッフに取り押さえられているという女性差別撤廃、男女平等を一般的関心とする報道写真である。しかし、この点を差し置いて私に痛烈に訴えかけてくる「細部」がこの画像には存在する。このストウディウムを破壊するプンクトウムとは、目の前で女性が捕まえられている現状を前にカメラを向ける青文字の T シャツを着た男性である。この男性はめの前の状況を自分とは関係ないことのように感じ、どうすることもできずカメラを向けているのであろう。彼の存在は写真の中の本の「細部」に過ぎないが残酷なほどに私の胸を貫く「細部」である。なぜ、ここにプンクトウムを感じるのかというと、私は中学生の頃いじめられている友達がいたが止めることもできずにただぼんやりと眺めていた経験があるからだ。写真の中の彼も私と同じような立場にあり、この写真を見ながら自分の弱さを突き刺されているような感覚に陥り、ありえもしないことだが、なぜだか彼の向けているカメラに収められている写真が過去の何もできなかった自分を写しているのではないか、という空間の広がりさえ感じさせてしまう。写真の女性の活動にストウディウムを感じたが、細部により私という人間のズルさが指摘されているように感じストウディウムはみごとに破壊されてしまった。ここに私は空間のプンクトウムを感じた。(1458 文字)

<参考文献>

・キエフでも FEMEN がトップレス抗議、サッカー欧州選手権

<<https://www.afpbb.com/articles/modepress/2885211?pid=9144145>>

・ロラン・バルト「明るい部屋 写真についての覚書」 花輪 光訳(みすず書房、1985 年) 38～40 頁、56～60 頁、118～120 頁

「映像体験における記号論と主体」
ストゥディウム、プンクトウム、指標性 (indexicality)

法学部



渋谷敦志《ソマリアから逃れて来た難民の少女》 2011 年

この作品は、写真家の渋谷敦志がケニアで撮影した「ソマリアから逃れて来た難民の少女」である。渋谷は本学産業社会学部を出て報道写真家となり各国地域を渡り歩き、困窮する現地の人々や戦乱から逃れる難民を取材している。この作品も渋谷の活動の一環であり、ソマリアの戦乱から難民としてケニアに逃れてきた少女を写したものだ。

作品の質としてはグレースケールで処理されたもので、少女の肌の美しい質感や眼差しの解像、またブラックバックの落ち度が深刻に表現されている。渋谷はアフリカで撮影した作品の多くをグレースケールで撮影しているが、この作品も同様であり、報道写真としての様相を表現するのは当然のこと、色彩情報に意識をとられないようにすることも意図しているものと考えられる。

ストゥディウムとプンクトウムに関して、まず前者についてロラン・バルトは「明るい部屋」にて「その感動は、道徳的、政治的教養（文化）という合理的な仲介物を仲立ちとしている」と記した¹。これについては昨今テレビコマーシャルやポスター等で人目につき始めた難民保護のための寄付金や、これを目的として組織された団体の情報等が典型的な例といえる。情報媒体を介して流された情報である以上、誰かしらの目にはつくものだが、その多くの人々はその時には「可哀想」や「なんとかならないものか」といった哀れみの念を抱きはするものの、実際に行動することは少ない。この「哀れみ」は、(比較的)

豊かである日本において育ってきた者たちがその人生で彼らについて学習したことに由来すると考えられる。ここにストゥディウムが顕著に現れている。

後者については、同著に「写真の場面から矢のように発し、私を刺し貫きにやって来るのは、向こうのほう」とあるⁱⁱ。先の「哀れみの念」は受信者の自発的な道德心から起きるものであるが、こちらは見た瞬間、受信者が全く意識しない間に感情を貫くものだと考える。意識していないにもかかわらず涙が出てくる。そして衝動ののちに、その表現物の目的を意識的に実行する。ストゥディウムとプンクトゥムの出方は、いわば逆になっているものである。

この渋谷の作品がもつストゥディウムの概念は、先に述べた写真としての良さと、私のもつ哀れみの道德心によって現れた。「渋谷の写真」と、「難民を写したもの」という2つの観念が私を自発的に動かした。一方プンクトゥムの概念は私を一瞬だけ無にさせた。主被写体である少女の美しい眼差しが私をみつめている。確定したことはわからないが、これが私を貫いたのであろう。この少女について当然この1枚からは詳しくは知り得ない。しかし、それを除外したとしてもこの少女の瞳には人を惹きつける意味がある。

私がこの作品からプンクトゥムを感じたのには、以前私が活動していたストリートスナップが理由となる。東京の街をカメラを手に持ち歩き、華やかな社会の裏にある、いわば別世界を写したく撮っていた。ストリートスナップであるから、被写体に気づかれたくないという思いもあった(個人がわからないようにする努力は当然した)。ある路地裏で、私は一人の男にカメラを向けた。ホームレスだろうか、背中を向けて道端で寝ている。これを逃すまいとシャッターを切ろうとした。その瞬間、ミラーアップ中のファインダーに男の眼が写っていたのだ。怒っているとも、悲しんでいるともいえないその眼は私を一種の恐怖に陥れた。この渋谷の作品を見た瞬間にも同じ状況になった。以上から私はこの作品を選んだ。

(本文 1494 文字)

〈写真引用〉

FUJIFILM SQUARE ホームページ 写真展・イベントスケジュール

【写真家たちの新しい物語】 渋谷 敦志 写真展

「まなざしが会おう場所へ ―渴望するアフリカ―」

<https://fujifilmsquare.jp/photosalon/tokyo/s2/19053102.html>

〈参考文献〉

ⁱ ロラン・バルト 1985 『明るい部屋―写真についての覚書』(花輪光訳) みすず書房
(講義資料より引用)

ⁱⁱ 同上

2021 年度春セメスター『映像と表現 GB』 期末レポート

「映像体験における記号論と主体：ストゥディウム、プンクトウム、指標性(indexicality)」

文学部



Bence Máté <<Harvesting Frog's Legs>> 2019

バルト(1985)は、ストゥディウムについて、それがしつけによって与えられる一般的関心をもたらし要素であり、プンクトウムについて、一般的関心を破壊しつつ私を刺し貫きにやってくるような映像における偶然的要素であると述べる。

さて、私は前掲している写真、Bence Máté が撮影した、<<Harvesting Frog's Legs>>という写真について、プンクトウムを感じた。それはなぜかについて論述を行う。

まず、整理としてこの写真のストゥディウムについて論述したい。それを反転させることでこの写真のプンクトウムについて語る事が容易になると考えられるからである。さて、この場合のストゥディウムとは、人間の都合によって足をもぎ取られた可哀想な動物であ

る。あるいはそのような状況に陥りながらも痛みを感じさせないは虫類特有の形相である。これは、人間が自己移入することによって動物との差異を感じさせ、よりその悲惨さを拡大するような効果を持っている。また、中心で向き合いながら抱き合うようにして配置されているような部分にストゥディウムを感じることも可能である。この場合、人間の悲恋劇を感じさせるような舞台である。また、足をもがれてこれから餓死するなり、病死するなり、害敵に食べられ死に行く成虫と、これから未来がある卵のコントラストが、その色味の美しさとともに輝いているのかもしれない。これらの形象はあまりにも叙情的であるのでプンクトゥムであると考えられるかもしれない。しかし、それは間違いである。なぜなら、それらは恐らく撮影者によって意図されたものであるからである。それらは勿論、撮影者によって配置されたわけではないだろう。しかし、何枚も撮影者が撮影する中で、撮影者によって自覚され選び取られた偶然はもはや偶然ではなく、その写真における表現としては必然であるだろう。したがって、これらのあまりにも露悪的な表象はプンクトゥムとは到底言えないだろう。

では、そこから逃れるものとして、しかし私に突き刺さったものとは何か。それは、自らの死の直視である。この写真を一見すると、主に上部において何か違和感を覚えないだろうか。実は、水面が鏡面となり、投げ込まれたカエルの半身を映すことで、キメラのような様態の生物が見られるのである。この異常性に普段はすぐ気づくだろうが、被写体自体の異常性によってそれは巧妙に隠蔽される。しかし注意深く見れば気づくので、選定した撮影者が気づいていないことは考えられない。しかし、単なるスタチューとして配置された中心の二匹のカエル（特に右側）の目が、他のカエルに比べて歪んでいるように見えないだろうか。このカエルは他のカエルとは異なる何を見ているのだろうか。私には、このカエルが自らの内的な痛みでもこの地獄のような風景でも投げ入れられる半身の同種でもなく、水面に反射する自分自身を見ているように直観された。そして、それが私の同じような体験すなわち、これまでの人生において死を身近に感じた際に、深夜や明け方、薄汚れた鏡に映る自分をじっと眺めるという体験と同型性を持っており、その記憶が再生されることで、私を深く刺し貫いた。したがってこのような、自らの死の直視をしているようなカエルの歪んだ眼光こそが、この写真における私にとってのプンクトゥムである。

<参考文献>

ロラン・バルト『明るい部屋 写真についての覚書』（花輪光訳）（みすず書房、1985 年）

「映像体験における記号論と主体：ストゥディウム、プンクトウム、指標性 (indexicality)」

文学部



図 1 Jesica Rinald 《家を強制退去させられた少年たち》 2016

ロラン・バルトは著書『明るい部屋』の中でストゥディウムについて、「少なくともただちに「勉学」を意味するものではなく、あるものに心を傾けること、ある人に対する好み、ある種の一般的な思い入れを意味する。」と述べている。ここで彼が言及している好みや思い入れというものは何か特別なものではなく、私たちが一般的な教養として学校などで教

えられてきたような知識や道徳などに裏打ちされたものである。そしてこの感動や関心は同じ写真を見た多くの人々が同じように抱くものであり、そこに何か特別な激しさは宿らない。これは私たちが、どこか訪れたことの無い地域で起きた凄惨な事件や戦争などの人道的なニュースを見たときに感じる、どこか他人事な同情や感動と似たようなものであると私は考える。そしてこの概念は明確に言葉や文字といったものに表すことができる。

このストゥディウムという概念と対になる概念がプンクトウムである。ロラン・バルトは同書の中でこの概念について「ストゥディウムを破壊（または分断）しにやって来るものである。」と述べた。このプンクトウムという言葉はもともとラテン語で点を意味する単語である。また彼はこの言葉について「写真の場面から矢のように発し、私を刺し貫きにやって来るのは、向こうのほうである。ラテン語には、そうした傷、刺し傷、鋭くとがった道具によってつけられた標識（しるし）を表わす語」と表現した。ストゥディウムが一般的な教養や知識を拠る所とする平均的な感動や関心のようなものをあらわす概念だったのに対して、プンクトウムは写真を見た個人のみが持つ経験や記憶、感性を元とする。つまりある写真の主題や背景にかかわらず、その写真のディテールや空気感というものに一部の個人のみが抱く感動である。そしてその感動は一般的で平均的なものとは違い、自分の感性にそのまま突き刺さるような強い衝撃をもったものであり、ストゥディウムと違い一般的に言葉などのコードによって他人に伝えることが難しい概念であると考ええる。

私がプンクトウムを感じた写真の例として挙げた写真は森の中で壊れた車に二人の少年が乗り、双眼鏡のようなもので月を見上げているという写真である。この写真は「家を強制退去させられた少年たち」という作品で、2016年にピューリッツァー賞を受賞した作品である。。私は、私がこの作品に写っている少年たちと同じ年ごろであったとき、祖父の家に訪れ遊びに行った森の中で夕方ごろに兄と一緒に迷子になったという経験をもとにしてこの写真にプンクトウムを感じた。これからだんだんと日が落ちていき夜が来てしまう、どのようにして家族のところまで帰るのか、また野生の動物に遭遇してしまうかもしれない、という恐ろしさがあるはずなのにその当時私と兄は意外にも恐怖や不安を抱かなかったということは今でも鮮明に覚えている。そしてこの写真を見たとき、正確な時間はわからないが、薄暗い森の中で幼いであろう少年が二人だけという状況なのにも関わらず、そんなことを気にも留めないように空に浮かんだ月を双眼鏡で一心に見上げている姿に、小さい時にしか抱くことができない幼児的万能感を感じ、そしてそれを感じたときの情景と感覚がもう一度よみがえってきた。そしてこのうまく言葉にすることができないような何とも言えない感覚こそがロラン・バルトが示したプンクトウムという感覚なのではないかとか考えた。

《参考文献》

ロラン・バルト 1985 『明るい部屋—写真についての覚書』（花輪光訳）みすず書房

映像体験における記号論と主体：ストゥディウム、プンクトゥム、指標性 (indexicality)



耳が聞こえなかった少年が、医師により補聴器をとりつけられ、生まれて初めて「音」を聞いたときの表情(写真家 JackBradley 、記事「Reader's Digest "Unforgettable moments caught on film"」【1974】)

この写真は生まれつき聴覚障害を抱えている少年が生まれて初めて補聴器をつけたときの報道写真として有名なものである。少年は当時5歳である。

私は生まれつきの難聴であり日常生活は補聴器と共に過ごしている。このこの写真からは様々なことが読み取ることができる。少年がつけているタイプの補聴器はトランジスタ補聴器という。今私がつけているデジタル補聴器(集音器の部分が小型化し耳にかけるサイズに収まり音の性質もよい)とはタイプが異なり大きな集音器とそこから伸びるイヤホンによって音を聞くのだ。写真の少年がどれだけ聴力が低く、この当時の今のものとは比べると性能が良くない補聴器を初めてつけたときこの少年がどれだけの音を綺麗に聴こえてたのかを私には推測できない。しかし、この少年が生まれて初めて補聴器をつけてこれまでに聞いたことのない音を聞いたときに感じた、新しい世界への驚きや音そのものへの発見はこれからの若い難聴者たちが初めて音を聞いたときに感じる感動に通じるものがある。それだけでなく聴覚障害を抱える者以外にも訴えかける音の世界の素晴らしさを教えてくれる。

私が授業や文献を通して考えたストゥディウムとは表面的な好き嫌いの感情であり、好きな理由も嫌いな理由も正確に説明ができるものと捉えられる。これは内面への知識を持っていることによってやっと初めて他のものの内面に興味をもつことに至る。受動的な働き

である。内面に深く立ち入らない不干渉なもののために他のものが自らを傷つけることも、自らが他のものを傷つけることもない、表面的な交わりしかならない。互いに気を使い合う知人以上友人未満の関係に似たものを感じる。

対するプンクトゥムは自らの本能に従った能動的な働きである。この働きは内面に積極的に立ち入るために、時には内面を傷つけたり自らが傷つけられたりしてしまうこともあるが、その働きによって初めて内面を深く理解し、絡み合うことになる。ロランバルトはこれを「刺し傷、小さな穴、小さな斑点、小さな裂け目のこと」としてしたが、この穴をピッタリ埋める者の立ち位置として自らが存在すると理解した。愛し合っている恋人関係の例えを思い浮かべた。

私は写真を見たときに心のどこかで懐かしさを感じた。この写真の説明書きを見ないでも私には見た瞬間にこれがこの少年が初めて音を聞いた瞬間を捉えたものだと認識できる。それは私がこの少年と同じ当事者に当たることに起因する。よってこれはストゥディウムに近いと言える。しかし、私の記憶に自身が当事者になった瞬間の記憶はない。私が生まれつきの難聴であるために当然のことといえる。私が幼かった頃に経験したこの出来事を思い起こさせてくれた。写真でありながら一つの映像を見たかのようにこれまでの人生で私が聴覚障害を抱えていることで受けてきた様々な偏見や差別をこの少年が包み込んでくれた。少年と私以外にも写真には映っていない医者や少年の家族、親戚、看護師さんと多くの人の働きが色づいて見えた。この少年の今後を知ることはできないが、将来この少年が受ける人生の幸福や苦難を直感的に感じられた。私を愛し、愛させてくれるのだ。したがって私はこの写真から深いプンクトゥムを感じた。

参考文献

ロランバルト 『明るい部屋』

「映像と表現（GB）」授業に対する受講生の感想

* 最終回授業の「リアクションペーパー」（300人中216人提出）より抜粋

映像と表現の授業を通して映像特に写真に向ける先代たちの試みと写真のその先を時系列に沿って歴史的に学ぶことができ、写真とは何かという一貫した問いが自分の中にあり続けました。それは特に先代や発明家が絵画のその先のリアルを追い求めた時代に答えがあるような気がしました。現在全てがバーチャル化していく中で先ほども述べたようにが本物で何が本物じゃないかは分からなくなっていますが、偶然も必然も全て一瞬の中に事実として収められる写真に一度戻ってみてもいいのではないかと思います。

この授業で映像に足して得られた知識や感じたことはこれから先社会を見つめていく中で非常に役に立つものでした。

法学部2回生

今回の授業で、初回で扱った鳥の騙し絵から、ダゲレオタイプのカメラまで、総復習することができました。私は今手に「川」の絵が高額で売られている感性には理解に苦しみますが、間違いなく映像に対する興味と理解が持てました。

そして、当初この授業を選択した理由は、時間の都合が良かったからという短絡的なもので、法学部だから、映像には興味を持っていないような気がして、あまり前向きな気持ちで授業を受けていませんでした。しかし、私が1番興味を持ったのは、バルトが指摘したプンクトゥムという存在です。不意に移ってしまった一部分が、見る人にとってはその細部だけで全体よりも価値が高まるということに面白さを感じました。最後の課題でプンクトゥムとストゥディウムについて考えるときに1番面白く、プンクトゥムを感じる写真を探すこと自体は、実は感動を求めているというある種のストゥディウムなのではないか、などたくさん考えることができました。そう考えると、一体何がプンクトゥムで、ストゥディウムなのかという哲学になり、それはそれで面白かったです。最終レポートの提出にあたり、プンクトゥムを感じる写真を探すのに一週間ほどかなり時間がかかりました。しかし、写真のストゥディウムが写真を見た瞬間と同時に破壊され、自分に細部が刺さっているように感じた瞬間は、言葉にできる様な感覚ではなく、「バルトの言いたいことってこういうことなのか」というさらなる理解につながりました。映像の見せ方、映像の作られ方に関しては、素人並の理解でしたが、映像を見せられた時の感受の論理性は深く理解することができました。とても楽しい授業でした。ありがとうございました。

法学部2回生

私は今まで一般教養の授業を真面目に受けたことがありませんでした。もちろん、真剣に取り組んでいなかったためその学問に対する理解も深まらず、得るものは何もありませんでした。しかし、本授業において私は映像に興味を持つことができました。はじめのうちは映像に対する理解が乏しく、ついていけない時の方が多かったです。しかし、映像に対する興味自体は変わらずあったので何とか理解しようと真剣になることができ、最後の方は自分なりに映像の概念について理解することができました。映像に対する理解が深まってからは先生の授業がより一層楽しいものになり、初めて一般教養の授業で「学んでいる」と感じるすることができました。今までは一般教養の授業の受講は単位取得目的しかありませんでしたが、この授業をとおして「学び」として一般教養の授業をみることができるようになりました。私の一般教養の授業に対するイメージを変えてくださり、ありがとうございました。素敵な授業をありがとうございました。

法学部2回生

今回、15回の映像と表現を通して、映像の原点、映像と表現の方法、映像と社会などの基礎知識から発展的な知識まで学ぶことができました。

私が一番印象に残っている講義は、絵が盛んな時代で突如、短時間でそのままの絵を写すことができる写真の登場がした講義です。確かに、私自身も写真の方が短時間で写すことができ、画質もいいから写真の方がいいと思っていましたが、去年に大塚美術館に行った時に初めて絵に惹かれるという体験をしました。これは、絶対に写真では再現できないと感じました。

やはり、絵も時間がかかることもあり、とてもいい面が見つかりました。あえて、少しぼかして書いたり、濃く書いたり写真ではできない表現だったので、写真も絵もともこの講義で考えることができ、様々な魅力に触れることができました。

今回、コロナ禍ということもあり、対面で講義は受けられませんでした。ズームで私達が学びやすくするために、色々と映画を見たりなど工夫してくださってありがとうございました。

産業社会学部4回生

私はメディア社会専攻に所属しているため、多くの授業で「映像」については言及されているが、この講義では「映像とは何か」「見るとは何か」「なぜ見たいのか」「なぜ心に残るのか」といった、より本質的な部分が掘り下げられており、とても新鮮だった。学部で専攻しているように、メディアの仕組みや仕掛けを学ぶことは、「メディア」について研究する上で不可欠である。ただ、この講義で扱われていたように、より深く、答えがないところまで掘り下げること、とても重要な視点が得られると、この授業を

通して実感した。

産業社会学部 3 回生

韓国と日本の花札の違いの話が面白かった。好きな韓国人のYouTuberの家族が花札をやっていたので、韓国にも花札があることを知って興味深かったが、歴史的な背景や、花札の種類の違いの話聞いてもっと気になった。

この授業を通して、自分が普段見ている写真や映像の歴史を知れて面白かったし、自分の普段の“認識”について再び考えるきっかけとなった。余談だが、授業で取り扱ったシネマトグラフが、授業後たまたま読んでいた『ゴールデンカムイ』という日露戦争後の北海道やアイヌを取り扱った日本の漫画で登場して、授業で習った知識を使いながら読むことができて授業で習ってよかったと思った。

産業社会学部 3 回生

授業中に鑑賞した映像を見て、映像が伝えるリアルな重みについて考えさせられた。ドキュメンタリー映像や報道写真の中には残酷な事実を突きつけるものもある。その残酷さに対して思わず目を背けたくなったとしたら、その作品こそ自分がきちんと向き合い、知らなければならないものなのではないか、と感じた。また、作品と向き合った先にこそ、その作品の意義を見出すことができるのではないかと考える。

春学期の15回の授業を受講して、映像について様々な方面から学ぶことができて楽しかった。特に、固定概念にとらわれるのではなく、作品を柔軟な見方で鑑賞するおもしろさを知った。カメラ・オブスクラなどの初期の映像技術や撮影方法が非常に興味深く、自分にとって新たな学びだった。また、中間レポートの発表では、自分とは違った講義生の考えや視点を知ることができ、勉強になった。この授業を通してさまざまな映像作品や絵画、写真を鑑賞し、もっと色々な作品に触れてみたいと感じた。

産業社会学部 3 回生

授業を通して映像に関する様々な概念や視点などについて学んだが、特にプラトンとアリストテレスのイデア・シミュラクルとシュミレーションの話が印象に残っている。実在が存在しない、メディアを通じて仮想に触れる構図は、まさにこの映像と表現がzoom上で行われたことなどのコロナ禍の環境に通じるものがあり、生々しく、少し恐怖を感じた。ヒトラーの映像もこの話も最後の授業だったが、特に後者はこれまで学んだことの応用であり、怖さを感じた半面、これまでの学びが現代の理解につながったと感じた。

国際関係学部 1 回生

映像と表現ということで、最近のメディア関係の話ができた。教養授業だと思って軽く扱えると思って申し込んだが、写真と映像の歴史から始まって哲学的な概念と話を扱い、もし授業を受けなかったら一生知らなかった話について学ぶようになった。授業のさまざまなことが記憶に残るが映像機に対する授業が一番記憶に残る。

「エジソンと言えば電球を発明したということだけ知っていたが、彼も映像撮影機に大きな役割を果たしたということを授業で知った時に驚いた。また、絵を描かずに枠組みを通じて世の中を眺めるという新しい概念は、言葉通り「映像と表現」という授業にふさわしい内容だったと思う。絵のような世界と世界のような絵の境界でいろんな考えをすることができる良い機会だった。もともと私は映像学とメディアについて勉強したかったが、実力も足りなくて自信がなかったので挑戦できなかった。今回の教養授業で学んだ映像とメディアは私の人生に大きく役立つ内容ばかりだった

国際関係学部 1 回生（留学生）

この授業を通して、映像について今まで正直深く考えたことが無かったのですが、映像の歴史や効果について深く学ぶことが出来たので、映像に対する見方が180度変化しました。今まで何気なく見ていた映像に、こんなにも多くの人々が携わり、多くの歴史を来ずいたのだと分かりました。映像について学ぶことで、当時の社会の状況についても学ぶことが出来たので、映像は本当に奥が深いなと感じました。この授業を受講することで、より映像を身近に感じられるようになりました。今とは違う映像(モノクロ映像、コマ撮りなど)をこの授業で沢山鑑賞しましたが、現代の映像とは違う良さがあるなと思いました。写真を見たときに、一般的に多くの人々が感じる関心や感情である「ストゥディウム」と個人的な経験や記憶から感じる関心や感情である「プンクトウム」の二つを感じるということもこの授業を受講する前の自分であれば、気づけなかったので、この授業でこのような知識を身に付けることが出来、より写真を見返すのが楽しくなりました。なので、最近、過去の写真や映像から社会的事実を探したり、多くの報道写真や作品写真から、「ストゥディウム」や「プンクトウム」を探したりするのがとても楽しいです。私がこの授業を受講して、とても印象的であったのは、「人間の目は大雑把に物事をとらえる」ということです。その言葉を聞いたときに、とても納得しました。携帯電話やテレビ、映画の普及によって、より身近に映像があふれているこの時代に、こうして映像について学べる授業を受講することが出来て、とても良かったです。春semesterの間、素敵な授業をしてくださり、本当にありがとうございました。

文学部 1 回生

もはや今まで触れたことのない人はいないのではないかという程に現代の私たちにとって当たり前の映像技術やカメラに関して、誕生から現代までの歴史や技術の使われ方について知り、自分でも是非や有効性について考えることができた。例えば直近の「ドキュメンタリー映画における演出・再現は認められるべきか」というテーマでは、ドキュメンタリー映画の定義やあるべき姿について自分がどう考えて/感じているのかと振り返りつつ考えたが、講義内で実際自分が考えたことはこの先の映像の理解の仕方にも関わってきそうだと感じた。

中間レポートのテーマ「社会的事実を読み取ることのできる写真を撮影して説明する」について、講義内で概要は理解できたが実際自分でするとなるとテーマや写真のモチーフなどを考えることが個人的にかなり難しく感じた。講義内の発表では、どの発表も説得力のある写真と中味の詰まった説明で聞いていておもしろかったし、映像の理解・見方などについて学びに繋がった。例えば「新型コロナウイルス感染症」に関連して「自粛」という狭いテーマでも、三者三様の表現の仕方があることをあらためて感じた。

文学部2回生

私は写真をよく撮るのですが、今まで自分になかった"写真というものに対する視点"が得られて毎回の授業が非常に興味深かったです。さらに、プンクトゥムについて勉強したことで写真を見た時に起こる疑問によるなんとも言えない魅力の正体が言語化されたようでスッキリしました。今回のレポートは報道写真を題材としましたが、私には日常的な写真からプンクトゥムと呼べるような感覚を与えられた経験があり、今後についても写真を見ることに対する楽しみができ良い教養となりました。余談になりますが、宋先生ははじめは厳しい方なのかと思っておりましたが、授業回数を重ねる度先生のユーモアや優しさを感じられてその点でもこの授業をとって良かったと思っております。ありがとうございました。

文学部2回生